

1

次の文章を読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

- ① 仲間以外はみな風景。そう言ったのは社会学者の宮台真司^Aさんである。どんなにたくさんの人の中や公共の場においても、若い人たちの目には、自分のすぐ横にいる仲間や友だち以外は電柱やガードレールなどの風景にしか映っていない、という意味だ。きわめて信頼性の高い「若者の法則」だと思う。
- ② もちろん、電車の中でもこの法則は通じる。たとえ満員電車に乗っていても、若者にとっては家具や植木鉢と同じ車両にいるという感覚しかない。B、平気で化粧もすれば弁当も食べる。部屋の中で、「机が見ているから恥ずかしくて化粧ができない」と言う人はいないだろう。それと同じことだと考えれば、「どうして電車であんな傍若^Cなふるまいをするのか」という謎も解けるのではないか、と思う。
- ③ ただ問題は、この「若者の法則」は若者が勝手に決めてしまったもので、社会全体のものではない、ということだ。全員がこれを共有し、「電車や公園でもまわりの人間はいないものとして行動してよい」ということになれば、それぞれが勝手なことをやればよいだけなのだから摩擦も起きない。直接、自分に迷惑や被害が及ばない限りは、「見えないようにする」ことですべてをすませるわけだ。D、まだ多くの大人たちにとつては、若者が電車で化粧をしたり恋人とベタベタしたりするのは「みつともない」「不愉快だ」と感じられる。そのギャップが問題なのだ。
- ④ では今後は、たとえば電車の中などでは、どちらを標準ルールとすればよいのか。「それぞれが他人の目を意識せずに好きなことをする」という若者ルールの方か、それとも「他人の目がある公共の場では、やってはいけないことがある」という大人ルールの方か。

5

- 私自身は若者ルールにシフトしていくのも仕方ないではないかと思う一方で、「それは意外にむずかしいことかもしれない」と感じている。なぜなら、「他人の目を意識しない」ことは簡単だが、「自分も他人を意識しない」ことはかなり高度なテクニックを要するからだ。
- ⑥ 最近、「電車や駅でいちばん暴力的なのは五十代男性」という調査結果が新聞に載っていた。酔っ払ったり仕事で疲れたり、と理性や意志の力が弱まっているときに、電車で他人にぶつかったり駅員に何かで注意されたりすると、つい大声をあげたりなぐりかかったりしてしまう。そんな大人がけっこう多いらしい。つまり、他人に対して寛大になったり、すべては「風景」だとその言動をいっさい無視したりするのは、実は意外にむずかしいのだ。自然に周囲を無視できているように見える若者も、実はエネルギーを使っているのかもしれない。
- ⑦ 今の若者たちが四十代、五十代になり、仕事や家庭でのストレスがたまってくる年代になっても、電車で「自分は自分、他人は他人だよ」と思い続けられるだろうか。みんなが好き勝手に食べたり歌ったり踊ったり着替えたりしている車内^Gで、すべてを「見ないふり」してすませることなどできるだろうか。「自分はやりたいことやるけれど、他人がそうするのは耐えられない！」と「キレる大人」が続出、などということにはならないだろうか……。そう考えると、他人をまったく意識しないという若者ルールの実行には、大人ルール以上の理性や意志の力、ある種のトレーニングが必要、ということがわかるだろう。
- ⑧ それでも若者たちは、「好きなこととしていいじゃないか」と言うだろうか。「だいじょうぶ。問題なんて起こさないから、電車の中でもみんなが他人を気にしないでそれぞれ好きなことやろうよ」と言いきれぬ若者は、そもそもそれほど逸脱^Hしたことをしないような気もする。たとえ

正解率
60.0

(6) 文章中の^Gでと品詞が同じものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア 雨が降る日に出かけるのは面倒で、一日中家の中にいた。
- イ 大切なのは努力し続けることで、途中の結果ではない。
- ウ この書類は、黒いボールペンではつきりと書いて下さい。
- エ 先生は来年留学されるそうで、当分お会いできなくなる。

〔 〕

正解率
30.4

(7) この文章の段落の構成として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア [3]段落は、[2]段落で挙げた具体例について、詳しく説明している。
- イ [4]段落は、[1]～[3]段落の内容に対して予想される反論を示している。
- ウ [5]段落は、[3]段落で提示した問題に対する筆者の考えを述べている。
- エ [8]段落は、[4]～[7]段落の内容をまとめて、筆者の考えを示している。

〔 〕

正解率
30.5

(8) この文章で述べられている内容として合っているものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア 多くの大人たちは他人を気にしないで行動することに抵抗を感じる。
- イ 電車の中で大人が大声でしゃべるのは、働き盛りの年代になり、仕事においても家庭においてもストレスがたまっているからである。
- ウ 電車の中で若者が平気で化粧をしたり、弁当を食べたりするのは、自分の部屋と公共の場との明確な区別ができていないためである。
- エ 公共の場でそれぞれが好きなことをしていても、直接迷惑や被害を

及ぼさない限りは、周囲の人々との間に摩擦が生じることはない。

〔 〕

2

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

堀河院の御時、勘解由次官明宗とて、いみじき笛吹きありけり。ゆゆしき心おくれの人なり。院、笛聞こしめされむとて、召したりける時、帝の御前と思ふに、臆して、わななきて、え吹かざりけり。

本意なしとて、相知れりける女房に仰せられて、「私に坪の辺りに呼びて、吹かせよ。われ、立ち聞かむ」と仰せありければ、月の夜、かたらひ契りて、吹かせけり。「女房の聞く」と思ふに、はばかりかたなくて思ふさまに吹きける。世にたぐひなく、めでたかりけり。

帝、感に堪へさせ給はず、「日ごろ、上手とは聞こしめしつれども、かくほどまでは思しめさず。いとどこそめでたけれ」と仰せ出されたるに、「さは、帝の聞こしめしけるよ」と、たちまちに臆して、さわぎけるほどに、縁より落ちにけり。「安楽塩」といふ異名を付きにけり。

昔、秦舞陽が始皇帝を見奉りて、色変じ、身ふるひたりけるは、逆心をつつみえざりけるゆゑなり。明宗、なによりて、さしもあわてけると、をかし。

天徳の歌合に、博雅三位、講師つとむるに、ある歌を読みあやまりて、色変じ、声ふるひける由、かの時の記に見えたり。

かやうのこと、上古のよき人も、力及ばぬことなり。

〔十訓抄〕による

(注1) 堀河院 堀河天皇(一〇七九～一一〇七)。

(注2) 勘解由次官 官職名。

(注3) ゆゆしき心おくれの人 大変に気後れする人。

(注4) 本意なし 残念だ。

(注5) 私に 個人的に。

正解率
29.5

- (注6) 坪||中庭。
- (注7) 安楽塩||楽曲の名前。
- (注8) 秦舞陽||中国戦国時代の刺客の名。
- (注9) 天徳の歌合||天徳年間に催された歌会。「講師」は歌会で和歌を読み上げる役。
- (注10) 博雅三位||源博雅(よしかげ) (九一八~九八〇)。

(1) 文章中の ^A わななきて、え吹かざりけり の意味として最も適当なものを次のア~エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア 気持ちが動揺して、いつもほど上手には吹けなかった。
- イ 急に泣き出してしまい、とても吹くどころではなかった。
- ウ 笛をなくしたふりをして、あえて吹くことはしなかった。
- エ 体が小刻みに震えて、まったく吹くことができなかった。

[]

正解率
31.8

(2) 文章中の ^B 吹かせけり、^C 臆して の動作主として最も適当なものを次のア~エのうちから一つずつ選び、その記号を書け。

- ア 堀河院 イ 明宗
- ウ 女房 エ 秦舞陽

[]

正解率 11.5

(3) 文章中の「安楽塩^D」といふ異名 について説明した次の文の a に入ることをばを、文章中からそれぞれ漢字一字で抜き出して書け。

明宗が帝に気づいたときに取った行動から、「安楽塩」という楽曲の名前に「ああ、a b」ということばを掛けて、このようなあだ名が付けられた。

a b

正解率 45.2

(4) 文章中の ^E ふるひたりけるは を現代仮名遣いの表記に直して、すべてひらがなで書け。

[]

正解率 22.6

(5) 文章中の ^F かやうのこと とは、具体的にはどのようなことか。最も適当なものを次のア~エのうちから一つ選び、その記号を書け。

- ア 緊張しすぎたために冷静さを失ってしまい、失敗してしまうこと。
- イ 自分のたくらみを相手に見破られ、ひどくうろたえてしまうこと。
- ウ たとえ名人でも、大事な場面では失敗してしまうことがあること。
- エ 急に言いつけられたため、日ごろの実力を十分発揮できないこと。

[]